広島文教教育　Vol. 24　2009

子どものリトミック実践の現状と課題に関する研究

善　本　桂　子*

A Study on the Present Condition and the Problems of the Practice of Eurhythmics for Children

Keiko YOSHIMOTO

1．はじめに

ジャック＝ダルクローズ（1865～1950スイス）が創案したリトミックが、日本に紹介されて約100年が経った。その導入初期、歌舞伎役者であった市川左団次、小山内薫、作曲家の山田耕筰、舞踊家石井漠などがヨーロッパでリトミックを体験し、日本に紹介した。当時の日本では、音楽を学ぶために身体を動かすことに抵抗を感じた音楽家たちの反対によって、広く普及するには至らなかった。わが国においてリトミックは、山田耕筰や石井漠によって、まず舞踊や演劇の世界へ導入された。後になって音楽教育の分野へ導入されたのである。

音楽教育の分野にリトミックを導入したのは小林宗作（1893～1963）であった。小学校音楽教師であった小林宗作は、長女が歌う姿を見て、音楽教育を取り入れた幼稚園を作りたいと、ヨーロッパ（パリ）へ旅立ち、1923（大正12）年、ダルクローズのリトミックと出会った。一年余り直接ダルクローズからリトミックを学んだ彼は、帰国後小学校長として、リトミックを取り入れたユニークな教育を実践した（小林、1996、p. 125）。小林が校長であったトモエ小学校に転校して来たのが黒柳徹子であった。彼女は、この小学校でのリトミック経験について、著書『窓際のトットちゃん』において述べている。リトミックの授業は、幼い彼女に新鮮な時間であった（黒柳、1981、p. 107）。トモエ小学校は戦災により廃校になったが、その後、小林は国立音楽大学に赴任し、同大学附属幼稚園などでリトミック教育を実践した。

戦後、被爆地広島から招聘され、ニューヨーク・ダルクローズ音楽学校へ留学した板野平（1928広島～2009東京）は、帰国後、小林が勤めていた国立音楽大学に赴任し、全国の幼稚園、小学校などへの普及・拡大に努めた。

こうした人々の尽力によって、今日的には幼児教育の定番となったリトミックであるが、身体を動かして音楽を学ぶ、という斬新なアイデアは、幼い子どもたちの教育だけに留まらない。現在では、小学校・特別支援学校・高齢者を対象とした実践でも注目されるようになった。また学習指導要領や、幼稚園教育要領の改訂により、小学校においても音楽と動きを結びつけた教育が取り入れられるようになった（文部科学省、2008、p. 15）。

リトミックは、豊かな感性や自由な表現力を育成しようとする内容を持っており、多方面から注目されるようになったが、実際の保育現場や音楽教室の指導者は、リトミックをどのように捉え、指導しているのだろうか。何のために

* 本学准教授

リトミックを行うのか、子どもたちはどのような力を獲得していると認識しているのか、などさまざまな疑問が残されている。

リトミックの三本柱に含まれるリズムやソルフェージュ、そして即興演奏の能力が、子どもの音楽能力を育てるために必要であることは、学校教育で音楽授業を担当する者だけでなく、保育者や音楽教室の教師たちも痛感していることである（ダルクローズ、2003、p. 47～50）。

子どもたちが、音を楽譜や音符に置き換えて、イメージして、音楽を学ぶ方法を考える教師は多い（柴田、2002、p. 36）。また、子どもたちがよい耳や絶対音感をつけることを目的としたソルフェージュ教育も存在する（江口、2002、p. 36；渡辺、2005、p. 50）。しかし、これらはリズムやソルフェージュを行うための方法論であり、動きを伴うことが少ない。

また、実際にリトミック教育によって子どもたちがどのような力を獲得しているか、これ迄実践者を対象とした実証的な研究は殆ど無い。

そこで本稿では、リトミック指導者へのアンケート調査を通して、子どもたちのリトミックレッスンの様子や実態を把握し、子どもがどのような音楽的な力や、その他の能力を身につけているのか検討を加える。

2．リトミック教育について

リトミック音楽教育法は、スイスの作曲家であり、音楽教育家であったエミール・ジャック＝ダルクローズによって創案された。ジュネーブ音楽院で音楽理論の講義をしていたダルクローズは、目の前を歩く学生を見て、音楽と動きを結びつけた、という逸話が残っている（石丸、1996、p. 116）。彼は、教鞭をとる中で、優秀な学生たちさえも、十分な音楽表現をしていないことに気づき、身体を使ったエクササイズを紹介した。当時、音楽を学ぶために身体を動かすことは、全く行われていなかったため、ダルクローズの新しい考えは、強烈な反対に遭う。しかし、彼は、人間の持つ“歩く”という身体の動きに注目し、人間が一定のテンポで歩くことをリズムの基礎として、音楽を学ぶことと結びつけた。

音楽は一定のテンポで流れる。その心地よさを味わいながら、音楽の流れに合わせて、意識して歩き、再び音楽に耳を傾ける。そして、その音楽の表情（ニュアンス）を聴き分けるのである（ダルクローズ、2003、p. 36）。また、ダルクローズは、子どもたちが持っている音楽的センスについて、早くから気付いていた。彼は、著書『リズム・音楽・教育』第Ⅳ章「音楽と子ども」（1912）の中でそのことについて触れ、「子どもが音楽を感じ取り、受け入れ、心身を音楽と一体化させ、耳で聞くだけでなく、全身全霊で聞くように学ぶことである」（ダルクローズ、2003、p. 37）と述べている。

3．現代の子どもの教育事情

子どもの生活スタイルの変化は著しい。一般的に、戦後の家庭の多くでは、学校から帰ると母親が迎えてくれ、おやつを食べて宿題をすませて友人と遊ぶ。夕方５時のサイレンと共に帰宅し、習っているピアノなどを練習し、家族と共に夕食を食べていた。テレビの普及と共に、徐々に生活スタイルは変わってきた。情報の氾濫と共に、核家族化が進む。祖父母のいない家庭、共働きの家庭も多い。こうして鍵っ子が増えている。

男女雇用均等法が定められ、女性の社会進出が進み、現在の子どもたちは母親のいない家に帰宅することが多い。レッスンやお稽古事は、子ども自身で出かける。教室を主宰する指導者

たちは、子どもたちに会えるが、母親とは会えない。レッスンの状況について親に報告できないことが多い。指導者は、レッスン生やその家族とのコミュニケーションを取ることが難しい。また、子どもたちは外で遊ぶことが少なくなり、ゲーム機等で一人遊びをする。その結果、友だちと遊ぶことができず、友だちとのコミュニケーションを取ることができない子どもが増えている。

忙しい母親と、家で待つ子どもたちは、お稽古事をするが、結果が目に見えることに走っているように感じる。どれだけのことを学んできたかチェックする母親たちも、目に見える結果に翻弄されるという傾向を生んでいるように思われる。リトミックのように、子どもたちが身体を動かして学び、その結果を心に蓄積するものは、行なったか、行なっていないか、外見から判断することができない。だからこそ、家庭から信頼され、教師たちが安心してリトミックのレッスンを進めていく環境を作ることが望まれるのである。

4．子どものリトミックレッスンについて

筆者は15歳（高校１年）のときにリトミックに出会い、そのすばらしさを体感した。そのとき直感的に思ったことは、自分が子どものとき、リトミックに出会っていればよかった、ということである。今、そのすばらしさを知ったことで、幼い頃、子どもたちが必要なことを身につけるリトミックを、体験しながら育ちたかったと実感する。

筆者は、幼い頃からピアノを学んだ。読譜や指の練習、繰り返して行う毎日の練習。学習を継続することの忍耐力や、繰り返して練習して曲を仕上げることは学んだが、音楽の楽しさや美しさを実感する前に、技術の未熟さや練習不足を指摘され、挫折しそうになった。しかし、曲を仕上げたときに大きな感動を味わい、かろうじて続けることができた。そしてリトミックと出会ったことで、音楽のすばらしさを体験し、現在の自分には、なくてはならないものになっている。

もし、子どもたちが音楽を学ぶとき、動きを伴うことによって、音楽に興味を持って取り組むことができたら、より一層音を楽しく受け止め、さらに音を敏感に聴こうとするのではないかと思うようになった。そして、現代の子どもたちの様子を知りたいと思うようになった。現在のリトミックレッスンはどのように行われているのか。子どもたちはどのような力を身につけているのか。

ダルクローズは、音楽的な子どもたちがたくさんいると考えた。拍子外れの行進をしたり、ピアノのレッスンを拒絶したりするが、音楽的感覚に欠けているわけではない。音楽の素質は個人の中に隠されている、と述べている（ダルクローズ、2003、p. 35）。確かに、耳を傾けてしっかり音楽を聴こうとしなければ、音楽を構成しているリズムやメロディ・ハーモニーを聴き取ることができない。幼い頃に音楽的な感覚を身につけることによって、音に敏感な耳と心を持ち、音楽を聴きたい、楽器を演奏したい、と思うのではないか。身体を動かして音楽を学ぶことで、さらに興味や関心、意欲を持って音楽と向き合うことができるのではないかと思われる。

5．リトミック実践の実態

(1) 調査の目的

実際に子どものリトミックレッスンはどのように行われているのだろうか。また、リトミックを実践している指導者はどのような思いで子

どもたちと向き合っているのだろうか。ここではそうしたリトミック実践の実態を明らかにすることを目的にしている。

(2) 方法

対象者：リトミック研究センター広島第一支局[1)]でリトミックを学び、実践している学生・保育士・教師約180名。対象者は2009年５月にスタートした初級クラス（60名）から、中級クラス（33名）、上級クラス（21名）、特別コース（18名）、リトミック歴５年以上の特別２クラス（10年以上の登録者も含まれる。46名）までの５クラスであった。また、リトミックについて学んだB女子大学学生や卒業生にも回答を求めた（12名）。合計194名にアンケート用紙を配付した。回収数は144名であった（回収率74.2%）。

調査期間：2009年11月

手 続 き：対象者に直接アンケート用紙を手渡した。回答用紙は、直接筆者が受け取ったり、あるいは郵送で送られてきたりした。

(3) アンケート結果

まずは、アンケートの質問順にその回答の結果を見てみよう。

①　対象者の構成

Ｑ１では、回答者自身について（回答者の年齢・性別・住居・センターのクラス）尋ねた。回答者の年齢別の人数を表１に纏めた。

10歳代４名は、学生の受講者である。また、20歳代55名中15名が学生であった。

性別は、男性２名（1.4%）、女性142名（98.6%）であり、圧倒的に女性の回答者が多かった。リトミック指導者は、実際のところ圧倒的に女性が多い。

表１　年齢別回答者

年　齢	人　数（%）
10歳代	4名（ 2.7%）
20歳代	55名（38.1%）
30歳代	30名（21.5%）
40歳代	42名（29　%）
50歳代	10名（ 6.9%）
60歳代	3名（ 2　%）
計	144名

対象者の居住地は、広島市内73名（50.7%）、広島県内50名（34.7%）、中国地方13名（９%）、その他６名（4.2%）、不明２名（1.4%）であった。広島市内で開催される研修会のため、やはり圧倒的に広島市内、県内居住者が多い結果であった。市内・県内併せて123名（85.4%）にのぼる。

リトミック研究センター広島第一支局受講者の回答は130名で、全回答者の約90%であった。クラス別の内訳は、初級40名、中級16名、上級17名、特別10名、特別２　38名、指導者養成校（大阪）１名、指導スタッフ４名、クラス不明４名、計130名であった。

特に、初級（１年目）クラス受講者からは、多くの回答を得ることができた。また、特別２クラス（受講歴５年以上）クラスからも多くの回答を得た。このクラスは、研究センター広島第一支局に５年以上在籍し、リトミックを指導しながら、自らも学んでいるベテラン指導者たちである。彼女らはリトミック経験が豊かであり、日常的にレッスンを行い、さらに自らに磨きをかけている。記述部分で貴重な意見を多く頂戴した。

②　子どものリトミック実践の頻度

Ｑ２は、「子どもたちのレッスンをしている

か」という質問であった。実際に子どもたちのリトミックレッスンを「行っている」という回答は、64名（初級８名、中級５名、上級４名、特別５名、特別２ 32名、スタッフ４名、クラス不明６名）であった。これは、回答者144名中の44.4％であり、学生19名を差し引くと、レッスンを行っている受講者は、125名中64名（51.2％）で、全回答者のおよそ半数にあたる。

また、レッスンを「行っていない」は、初級32／40名（80％）、中級11／16名（68.7％）、上級13／17名（76.5％）、特別5／10名（50％）、特別２ 6／38名（15.8％）、クラス不明13名（学生を含む）計80名であった。なお、ここで表示した％は各クラス別の割合である。受講１年目の初級から４年目の上級クラスにおいては、レッスンを行っていない受講者が、クラス登録者の半数を超えた。一方、特別２クラス（５年以上）の受講者は、受講しながらレッスンを行っている者が84％であった。このように、実際にリトミックを学んだ者が、全員リトミック指導を行っているわけではない。

この点について、回答者の自由記述には、「受講しながら、レッスンを行うことにまだ自信がない」と言う回答があった。「リトミックの魅力に惹かれ、また自分自身のために、幅広く音楽を受け止めるため」に、あるいは「自分の若返りのために、子どものレッスンは行わないが受講している」と述べる回答者もあり、子どもたちへの指導のためにリトミックを学んでいるだけではないという実態がわかった。

リトミックを体験することで、ふと聴こえてきた音について模索したり、目に入ったものを見つめたりするようになったりして、自らの感覚が鋭くなったことを実感する受講者もいた。つまり、子どもに伝えることより、自分自身の感覚を刺激する体験を味わっている受講者が多いことがわかった。

Ｑ３は、「定期的にレッスンを行っているか」というものであった。

「定期的に行っている」50名（73.5％）、「不定期で行っている」18名（26.5％）、という回答であった。つまり、レッスンを行っている者は68名となり、Ｑ２でレッスンを行っていると回答した者64名より多い。これは定期・不定期両方のレッスンを行っている指導者が含まれているようである。

「定期的に行っている」と答えたその内訳は、回答数64名中、月１回が11名（15.3％）、月２回（隔 週）12 名（16.7％）、月 3 回 4 名（5.5％）、毎週１回27名（37.5％）、不定期14名（19.4％）、その他４名（5.5％）と続く。複数回答（72件）があり、同一の指導者が、形態の違うレッスンを行っていることがわかった。

この結果から、子どもたちのレッスンがどのくらいの頻度で行われているか窺い知ることが出来る。筆者の幼い頃は、毎週行われるレッスンが常であった。前回のレッスンを次の学習の為のステップに用いるためには、子どもたちの記憶を確認することが必要である。前回の学習を復習することで、新たな内容が継ぎ足され、ステップアップする。果たして一ヶ月に一度のレッスンで、記憶の確認ができるのであろうか。もし、子どもたちが身体で覚えているのであれば、言葉ではなく、身体を動かして確認することができると考えられる。

子どもたちがリトミックに魅力を感じ、興味や意欲を持って臨むことを理想とするのであれば、記憶を取り戻すことに時間がかからない程度に、定期的に行われるレッスンが望まれる。

③　実践の対象・場所

Ｑ４は、「子育て支援や公民館などで、さまざまな年齢の子どもが共に学ぶ体系のレッスンを行っているか」という質問であった。

回答64名中、「行っている」が15名（23.4％）であった。さまざまな年齢の子どもたちが一緒に学ぶレッスンのねらいは何であるか。この場合は、親子で参加し、友だちを作り、地域の輪を広げるために行われるものが多い。また単発で行われる場合が多い。

幼い子どもたちは、年齢や発達によって受け止めるものが異なる。発達に応じた支援が求められる中で、異なる年齢の子どもたちが共に学ぶ場、とは。子育て支援として行われるリトミックは、親子で楽しい時間を過ごすことができるが、リトミックから求められる目標やねらいを外さず行われるレッスンが望まれる。

④　幼稚園保育園でのリトミック

Ｑ５は、「幼稚園や保育園において、クラス単位のレッスンを行っているか」という質問であった。

ここでは、Ｑ４とは違い、子どもたちの年齢や発達に応じたレッスン展開ができる。今回は、クラス担任が行うか、リトミック専門の指導者が行っているか、という質問項目を設けなかったため、どちらであるか把握していない。

クラス担任が行うレッスンは、毎日子どもたちと出会うことができ、普段の子どもの様子が分かり、より細やかな指導を展開することができる。その一方で、「先入観で子どもを見てしまう」という意見があった。またリトミック専門の指導者が定期的にクラス指導を行う場合は、先入観なく子どもを観察することができ、意外な一面を発見することも可能である。しかし、限られた時間内であり、クラスの人数が多い場合、子どもたち全員が楽しんだり、その日の目標やねらいを達成できたりすることは、なかなか難しいようである。専門の指導者がレッスンを行う場合、クラス担任は、子どもと共にレッスンに参加するか、専門の指導者に任せて子どもの様子を観察するか、役割が異なる。

⑤　幼稚園・保育園以外でのレッスン

幼稚園・保育園以外でのレッスンについて聞いたＱ６は、いわゆるプライベートな個人レッスンを指している。回答57名中「個人レッスンを行っている」指導者は39名（68.4％）であった。

幼い子どもたちが、初めからピアノや電子オルガンのレッスンに入るのではなく、「音楽の楽しさや美しさを、動きとともに体験し、興味を持ってレッスンに入る」というケースや、「個人レッスン中に、音楽の理論を理解するためにリトミックを取り入れて行っている」という回答もあった。

前述したように、現代ではお稽古事への取り組みの様子が変わってきている。物事を学ぶ厳しさと、それを続けることの忍耐力を伝えることと、なおかつ毎週のレッスンを楽しくする工夫が、音楽教室の指導者に求められていると言える。

⑥　リトミック実践の対象年齢

Ｑ７では、対象となる子どもたちの年齢を聞いた。回答54名中、０～１歳のクラスは12名（22.2％）、小学生クラスは11名（20.4％）が、また複数クラスを持っている指導者は35名（64.8％）であった[2)]。

幼児を中心に、複数のクラスを持っている教師が多いようである。リトミック研究センターでは、０歳から１歳の乳児や、小学生を対象と

した講座が設けられている。レッスン開始の年齢が下がっていることがわかり、幼児のためのリトミックではなく、乳児から小学生など幅広い子どもたちのクラスが展開されていることがわかる。

また、特別支援学校でリトミックを実践している指導者がいることもわかった。小学部１年生から６年生、中学・高等部までの生徒たちと、身体を動かして音楽を聴くリトミックの手法を用いて、支援を行っている様子が書かれていた。

⑦　クラスの子どもの人数

Ｑ８では、１クラスの子どもの人数について尋ねた。その結果、子ども１人のためにクラスを開設している指導者は12名（18.8%）であった。一方、20名以上のクラスを担当している指導者は14名（21.9%）であった。これは幼稚園や保育園でのレッスンを指していると思われる。

１人の子どものために行われるレッスンは、その子どものペースに合わせて行うことができる。しかし、他の子どもの動きを観察したり、聴いたり、合わせたりする気持ちを育てることができない。他者と合わせる楽しさや、コミュニケーションを図るためには、複数の子どもが共に学ぶ環境が理想であると思われる。

幼稚園や保育園におけるクラス単位のレッスンは、子どもたちのさまざまな動きを発見することができ、子ども相互のコミュニケーションを図りながら進めることができる。しかし、幼い子どもは月齢や発達によってできることが違う。クラス全員が参加し、全員ができるようになるまでに時間がかかる。

⑧　１回のレッスン時間

Ｑ９では、１回のレッスン時間について聞いた。その結果、「５分」から「60分」まで、さまざまな回答があった。「５分」という回答は、楽器のレッスン前後に組み込まれているのではないか。一方、「60分」は、幼稚園や保育園でのレッスンではないか。あるいは、ピアノなど楽器のレッスン前後に組み込まれ、全ての時間を挙げているのではないかと思われる。

子どもの年齢にもよるが、彼らが集中して取り組むことができる時間を考える必要がある。

⑨　テキスト使用の有無

Ｑ10では、「テキストを使ってレッスンを進めているか」と尋ねたところ、Ｑ６の回答者57名中41名（71.9%）がテキストを使用していることがわかった。

テキストには、リトミックのねらいについて、また具体的な実践方法が述べられている。テキストを使用し、これを拠り所にすることで、指導者は先を見通し、安心してレッスンを展開できるようである。

⑩　子どもたちにテキストを持たせているか

Ｑ11では、「子どもたちにテキストを持たせているか」尋ねた。

回答54名中「持たせている」は、10名（18.5%）であった。Ｑ10の結果と併せてみると、自分自身はテキストを使用するが、子どもたちにはテキストを持たせていないという実態が明らかになった。

レッスンにおいてテキストを使用すると、座学になる可能性がある。動きを伴うリトミックにおいては、指導者、子ども共にテキストを見る時間がないことが考えられる。ここでは身体を動かして体験することだけで終わるのではなく、年齢が上がるとともに、子どもたちや保護者に、レッスンのねらいや内容を話し、理解を求めることが必要なのではないか、と思われる。

その一方で、テキストやノートを使用することで、日ごろのレッスン内容が目に見える形に置き換えられ、子どもたちがレッスンを続ける意欲に繋がるのではないかと思われる。

⑪　カリキュラムの作成について

Q12の「１年間のカリキュラムを作成しているか」という質問について、解答57名中「作成している」は33名（57.9%）、「作成していない」は24名（42.1%）であった。

定期的に行われているレッスンであれば、当然必要なカリキュラムである。しかし、カリキュラム通りに進むことができないことがある。自由記述の中には、「クラスや子どもの様子によって、また時間によって進度が変わることや、内容を変更せざるを得ない」という回答があった。

「作成していない」という回答は、不定期なレッスンなのか、それとも行き当たりばったりなのか。公民館など単発のレッスンであれば、連続したカリキュラムは必要ないのかもしれない。しかし、見通しを持って、そのレッスンを進めていくことが肝要になると考えられる。

⑫　子どもたちの様子

Q13では、子どもたちの様子について聞いた。回答52名中、「なかなか参加しない子ども」は存在しなかった。「全員もしくはほとんどの子どもの参加」が49名（94%）である。これは、まさに子どもたちが、動きながら学ぶことが好きで、意欲的に参加し、活動を楽しんでいることが読み取られる。

身体を動かすことが大好きな子どもたちは、リトミックを遊び感覚で捉え、意欲的に参加し、楽しみながらレッスンを通して多くのことを身につけているものと思われる。

⑬　音楽的な力

Q14では、「子どもたちが身につける音楽的な力」について指導者がどのように考えているか尋ねた（３つまで複数回答）。その結果を表２に纏めた。

回答数151中、最も多かったのは「リズム感」であった。この結果により、多くの指導者が、子どもたちがまず身につける力は「リズム感」と感じているようである。

ダルクローズは、歩くことに注目し、歩行リズムをレッスンに取り入れた。無意識に歩くのではなく、音楽をしっかり聴き、その音楽に合わせて歩いたり、身体を動かしたりすることで、子どもたちがリズム感を身につける必要性を、述べている（ダルクローズ、2003、p. 3）。

次に多かったのは「表現力」である。これは幼稚園教育要領や保育指針において、表現という領域があり、子どもたちの豊かな感性や表現力が求められていることに関連があると思われる（文部科学省、2008、p. 158；厚生労働省、2008、p. 96）。

表２　子どもたちが獲得していると指導者が考えている音楽的な力

音楽的な力	人　数
リズム感	38名（25.2 %）
表現力	25名（16.6 %）
音を聴き分ける力	24名（15.9 %）
拍子感	22名（14.6 %）
空間の認識	18名（11.9 %）
テンポ感	16名（10.6 %）
記憶力	4名（ 2.6 %）
歌う力	1名（ 0.66%）
読譜力	1名（ 0.66%）
演奏技術	1名（ 0.66%）
フレーズ感	1名（ 0.66%）
計	151名

次に多かったのは、「音を聴き分ける力」である。ダルクローズが、音に敏感であることを提唱した（ダルクローズ、2003、p. 37）が、幼い頃から身体を動かしながら音楽を聴き取ることで、敏感な耳が育つ。何気なく音が耳に入ってくるのではなく、しっかり聴き取ることで、高さや強さ等を判断する力や、音の持つ表情も受け止めることができる。以下、「拍子感」、「テンポ感」、「空間の認識」と続いた。つまり、心地よいテンポを認識することや、時間や力と相互に感じる空間を、子どもたちが体験している、と指導者は認識しているようである。

また、少数意見であるが、「記憶力」や「フレーズ感、」、「読譜力」などの回答もみられた。

指導者は、子どもたちがリトミックを体験することによって、こうした多様な能力を獲得できると感じている。これは、指導者がリトミックを自ら体験したことの反映と読み取ることもできる。

⑭　子どもたちが獲得する能力

Q15では「子どもたちが獲得する能力について」指導者がどのように感じているか尋ねた（3つまで複数回答）。その結果を表3に纏めた。

回答数161中最も多かったのは、「集中力」39名であった。「リトミックを経験すると集中力がつく」、とうたっている本が多くあるが、子どもたちは耳を澄まして音楽を聴きながら動くことで、集中力を身につけている実態が明らかになった。次に「反応力」、「表現力」、「コミュニケーション能力」、「協調性」、「想像力」と続いた。

子どもたちはリトミックをすることで、音楽を学んでいるのであるが、音楽的な力だけでなく、さまざまな能力を身につけていることがわかった。この他「注意力」、「創造力」、「記憶力」、「思いやり」、「優しさ」など、少数意見も多岐にわたり、子どもたちが他者に目を向け、社会で生きていくうえに必要であると言われる能力を、ここで見ることができた。

表3　子どもたちが獲得していると指導者が考えている能力

獲得する能力	人数（%）
集中力	39名（24.2%）
反応力	23名（14.3%）
表現力	21名（13　%）
反射神経	16名（ 9.9%）
協調性	15名（ 9.3%）
コミュニケーション能力	14名（ 8.7%）
想像力	10名（ 6.2%）
注意力	6名（ 3.7%）
思いやり	5名（ 3.1%）
記憶力	4名（ 2.5%）
優しさ	3名（ 1.9%）
創造力	2名（ 1.2%）
敏捷性	2名（ 1.2%）
他	1名（ 0.6%）
計	161名

6．考　　察

ジャック＝ダルクローズは、今からほぼ100年前に子どもたちの未知の力を信じ、幼い頃に鋭い感覚を研ぎ澄まし、さまざまな能力を身につけるために、リトミック教育を体系化した（ダルクローズ、2003、p. 56）。この考え方は、現代社会においてもなお新鮮である。

今回の調査を通して、多くの保育者や音楽指導者が、さまざまな形でリトミックを実践し、子どもたちとかかわる時間を持っていることがわかった。

彼らの多くは、自身がリトミック（＝音楽）を楽しみながら、意欲的に学んでいるようであ

る。

また、子どもたちが、レッスンを通して、リズム感をはじめ、表現力や音を聴き分ける力や拍子感など、音楽を学ぶ上で必要なセンスを身につけていると感じていることもわかった。

そして、リトミックの大きな特徴である（音楽表現における）時間・空間・エネルギー・ダイナミックスの関係性についても、子どもたちは動きで表現したり、演奏したりして学んでいることがわかった。

子どもたちは、一見音楽とは関係ないと思われるような能力（集中力や反射神経、思いやりや優しさなど）、つまり社会で生きていくために必要な能力をも同時に身につけている、と多くの指導者は考えている。例えば、音楽に合わせよう、反応しようと集中して聴くことによって、反射性や反応力が獲得される。また、他者とタイミングを合わせたり、同時に動くことを意識したりすることで、協調性やコミュニケーションの能力を獲得しているようである。

言い換えるなら、子どものリトミックレッスンは、現代の子どもたちが音楽と出会い、そのよさを知り、表現することの楽しさを味わい、生涯の心の支えとして、共に歩むことができるようにするためのスタートである。レッスンを通じて、子どもたちは指導者や友だちと出会い、音楽的な力だけでなく、社会で生きていくための能力をも身につけている。仲間と共に学ぶことで、友達の存在を知り、喜びを共感することができる。これらのことを通して、リトミックが全人教育とうたわれていることと繋がってくると思われる。

今回の調査では、リトミックレッスンが子どもと指導者１対１で行われている実態が明らかになったが、ここではレッスン形態や時間等の違いによる子どもの実態を掴むことができなかった。また、今回の調査により、指導者が抱えているいくつかの課題が見えてきた。

子どもたちが意欲的にレッスンに参加することで、指導者は、リトミックのねらいや目標をある程度理解しているように見受けられる。しかし、レッスンの低年齢化や、リトミックは結果の見えないお稽古事として、子どもたちが長くレッスンを継続することができるのか、不安を抱いている指導者も見られた。これは、リトミックレッスンにおいて、子どもたちが楽譜などのテキストを使用していないことにも通じるところがあるように思われる。

つまり、身体を動かして学ぶことによって、心と身体に豊かな感性を身につけるが、総じてリトミックは、即座に結果が見えないことによる不安を訴える指導者がいることも分かってきた。保育者や音楽指導者たちは、子どもたちとレッスンの内容を振り返り、子どもが行ったことを共通理解し、先の見通しを持って次のレッスンに臨むことが求められる。

また、筆者と同じように、「リトミックと早い時期に出会いたかった」と記述した指導者も存在したことから、今後は、保育者や音楽指導者などに焦点を当て、彼らがリトミックを知ったことで変化した意識や、身につけたことなど、彼ら自身が抱いている課題についても検討を加えていきたい。

注

1）リトミック研究センター（岩崎光弘会長）は、子どもたちにリトミック教育を通して、豊かな感性や柔軟な思考力を育み、わが国を担う人材育成を目指して、1986年に設立された非営利活動法人である。東京・大阪・名古屋に教員養成校をもち、全国36支局において、月例研修会を行い、リトミック指導者の育成に努めている。広島第一支局はその中の一つで、毎月月例研修会を開催している。

2）ここでは複数回答を含めると全体の比率は107％であった。

参考文献

石丸由理（1996）「ダルクローズのリトミック」エリザベス・バンドゥレスパー、石丸由理訳『ダルクローズのリトミック』、東京：ドレミ楽譜出版社

江口寿子（2002）「よい耳を育てる」、『ムジカノーヴァ』第33巻第３号、東京：音楽之友社

黒柳徹子（1981）『窓際のトットちゃん』、東京：講談社

厚生労働省（2008）「保育所保育指針解説書」、東京：フレーベル館

小林恵子（1996）「ダルクローズリトミックの日本への導入」、エリザベス・バンドゥレスパー、石丸由理訳『ダルクローズのリトミック』、東京：ドレミ楽譜出版社

柴田礼子（2002）「リズムであそぼう」、『ムジカノーヴァ』第33巻第５号、東京：音楽之友社

ジャック＝ダルクローズ，Ｅ．（2003）『リズムと音楽と教育』、東京：全音楽譜出版社

文部科学省（2008）「学習指導要領」、東京：教育芸術社

文部科学省（2008）「幼稚園教育要領解説」、東京：フレーベル館

渡辺健二他（2005）「何のためのソルフェージュ？」、『ムジカノーヴァ』第36巻第12号、東京：音楽之友社